中村俊定文庫
文 庫 18
682

花ノ志満（乙卯）寛政七　鳥路撰

乙卯年四月四日二十七回忌に当り

城北浅草極楽塔中哲相精舎法会

五十餉一頃

渾純と渇り――六ヶ年の歳月

紙記

君をたゝえ別れ東の深

笠ぬぎ見の秋のなごりを　高明

日暮と峰を人の雅来る　雨什

夫蔭の作る苔むす石畳　野河

幽風をさゝ千年の繚　生泉

類象

捻香

往昔五色墨の為ぶみ有し後ひとり紫の隈染の色を添給ひし柳芝師の教の色をうつす鳥酔翁四方に杖を引其色をましつゝ分て東の都に色さらにうつろはさる氏翁の誉れ也けりされや霜と降り星とうつりて廿七回今の格露庵法の莚をもふけて雅言の色を失ハさるも頼もき下官さゝハる事ありて上毛の古里に在しかゆかりの色の浅からされハ四七の道芝を遠きとせすけふや園長の教をつらなりて我ハ旅おしと思ハす花をきけ香をひねりて

平花菴

雨什

丸義

天原くと来て塚を――慈子花

次二句と異す

香語

東京都立中央図書館蔵

师没して二十七回やゝ式身の衰へを思へは小祥大祥休廣寂誌
廣轉と過て既に清淨本然忌近い未七とせ中ゝ追美ふすき
とハ思ほへす祖翁百回忌の折から後に南浦海晏禪尼の碑を
うつし遣南浦小庵へたり老足にけハすせめと毎月四日十日ハ
諸侍る何そ其霊のとまり続ハむ事やある世る流行くとて古事
古誌をつかハれ聞へさるを是とあす筆多し　我ハ师の名ゝ選れ
古人音題を鑑となして之祿の風調を慕ふ日何そ流行そのうち
まあらん二十餘年以前の教を新居し禪前に頭首して祈侍る
事しかり

憶ふ昔ゝ拂下に遊ふ忘きりこのあ　杜嘉文人合掌

東京都立中央図書館蔵

東京都立中央図書館蔵

○仰竟蓋翁概書屋と中奉る仰賀上壓の尊ふゝ累代
厳事家る仕俗名杜尾宋世君逝去の後二君る仕氏と世を過ま
ゝ禪徒る入今道を修し行ると之を学成んる仕氏
其徒を又過まて其氏北村季吟陸連哥の家にゝ俳諧
を学ひ遂しかへ氏を学て門る入門木鶯桃を学ひ
孫ゝの年あり大寧寺文延寶の比ゝ世氏道る親ゝ
ゝ和合享と移り元祿と改ゝゝの遊ふ所尾張の一派我
教起し門人共南尾雪を始ゝて十哲の注彼其他ゝ

中村俊定文庫

長水　石黒住
麥陰　柳岳　度岳士
羅後

羅浮先　羅浮振舞ノ
法士ノ

門人子弟と雖ども友は神都京師の英才の如し而して
其ひとりにして諸家を歴て生涯を之に麦秋の内
病苦より復して其名海内に聞し享保年中の流行世
挙て俳諧風と迄あり神しをより江都高俳諧宇宙
俗職柳岳は傳山岳士はすべ元会歌重法徳の門に入て
長水と號し下都石原に住て代々何某也後名を
変して麦阿柳岳折々載せて殷盛を世に乱れ
彩り正徳享保の比世を一面に法徳の門に取流行
して羅浮と号す三十五歴にして隆盛し世を切し人

（空アキ　其話了り）
（宝永七年五七記）
（享保三年）

羅浮振舞といふるを形して新しきを愛せ比奇麗妙
役者は市れ京十郎表号戸牛後は柳道海老蔵比道は猿しして世に
其名先師は門の子捨は名あり八屋あ元八こそ疱瘡
門の擬をもひし諸子抱付をの子附会は皆今の羅浮の名に
して世に名高し戸牛も世に名高し今世に屋の子鶴
あるに世に世人こひあ(ぬ)其子師の子の音物は牛御前の御歯冊
奉納をし残る歩り軸は法徳法例起(超)皆世に宗近遠之
中に戸牛又澤村宗十郎表佐納子坂東彦三郎表法薪水菜ひし
中に長水先師もか入ありしを後代絵る諸俳方の門

擬そこないし鏡は
宗そこ石いし金也
即ち鏡を石の手のひらから立寄は
其り四宗は四つと豆の上に継に故
其り也宗そこ有へは宗を接き其ため
人をすり物也
柳岳の号に「酒中花を楽しをれす
此義の中は酒の句多り尚
考へし

初代　調子（宝永元年五月三日歿
七十五才）

長水亮叔を思い出り
持換す

まと止まり近習の人々に作せ給ふ代中にまみとへる等
見て傳え聞て風流をなして狂ひ舞ふ事なひぬとりは
文学弱き新しい習ひ戦場の表もにて中風流ふも
藤を用ふる事徒なあるにいと得ある人きるにてそや
御嘆あり世人この所賜ーき何ふそ名表徒まて所
あるそと御賞ある恐き入ーとも旨ふ事共所
まもひまを少ーに情もきるにてそと代後忘取代習も
思ひ出まり弱ふ世にある和狂の道の風流第一元禄
前の舞ーミの道まと入殺とーとも七部集晋より虚実

不角風

五色墨（こしきぼくしちりん）

長水亮印ーう

栗崑崙のこの代まこの風流を志ふ事ありこの
ふ世の事の忘取も兼え古哲遠も近ふ云人と形り風流既ま
流行て不角風と云る事ふ多ふ入柳まこ確のこ物狂所
間色の今和所ふ世ある事をうーー搭の虞毒と近ふ一篇
しふ風流交ふ落る芸代出ふ世代宗門連之まふ
弦尺の徒ふをひと刷ふーーかふふ忘取を抜ふ代きて
五色墨と時ひ業ふふ後世の中忘取の人々係ふ自覚
世界一統ふ代五色墨行はーー代風儀とハふ事ぬ今て於霧尾
墨代ふひ用ふ所の忘印代ひ五色墨の時の忘備ふて

[illegible]

長谷の名に忘れと共に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麦河文考慶元の[illegible]に通をさく

通説麦林は[illegible]

[illegible]

麦林に赴く

[illegible]

麦林下四天王

柳屋　古山

寺岡　麻父

[illegible]

三斛庵 秋瓜 延享四年「鳥の跡」

しかし烏鐸の草菴も火の為に大破せしといへども都法士の

逆と成りて古御車総へ遣すく其後東金百林琥子再び

曽我野百塊今 録かへ人 付時序時紀行と云る集あり再び

烏鐸子三斛庵の礎を残し破功なつて稀流坊へ鉄砲町

しかれ葛飾と呼落 露といへる号を名のり延享

同元文八 寛保三年

路光子の年も五十回忌を勤む深川に庵を結

座形翁句塚の造営せしを再興あって同じ忌の

七部集あり是へ柳居七部集と云るも其後の事にて

柳居七部集

捲簾 一筆鳥 咲笑随筆 稲筏 佛神楽 鞭花 東中記

廿四

元禄乙亥（八）年生 （五七記の寛保一五十四才となる

東中記
夏山伏
雨の日数
若竹笠
鳥の跡
五組糸
二七の海工
三夜吟行
三景集
百時鳥

夏山伏 雨の日数 若竹笠 鳥の跡 五組（組）糸 二七の海工 三夜吟行

三景集 百時鳥 伊勢麦林 北華 皆諸子事前 辻村五竹房 東川子

に桜東に移りて染め盛りし事を云ふ 東川子 家絶へて

板は空しく荒廃に及ぶ 柳居 ことさら生の御崩（前？）残る

の昔より今に至り 櫻と云ふも静かに寂しくを蔵す 紀行は

句ともに歸をさまる事 誤き悟の第一と定めせし

古より出て秋瓜坊と言ふ事 古も粗ありけれ先忌より五年

をさまりし 既に寛保改元の年 辰五月 暁 寿齢五十有余

永くも在の室に入り給ひぬ 江戸都城北浅草新寺町 東国

徳院殿厚葬し其墓今猶あり此時や師の先師日
奈久七記と云る業あり宗門業流の花と云る業あり
柳先師滅後八年秋九月松尾門下忠拙公山鹿
甚人狩野一筋の流に堂塔を建立し
流の意見一人其角世に入類門なる名を響き弾
弟何れも雪止亦然
弟子なり柳先師存命の内柳先師の一養を受て所々に
かくれを移し流場を移し一生涯みれを移し一生涯の門中おい
嵐麦中村寿左衛門師し百姓山本伝兵衛師
後百姓
門弟
及是飯東睡雪黙鈍
上総東金人
上総人
宝暦五乙亥門弟成田三甲陽巡中中に拙豆腐屋飯とし
柳原より鉄砲町へ移る
山鹿 金太郎 門弟集共人 宝暦三年

世五

柳先師存命のうち二人まても我藩にあれ皆三解流の
弟子なれ江戸に来りて国津浦々に近も三解流者多の
かくれ居て吉信勢多なる乃家業を捨て多く
ありそれ名者師の功と和歌の道に義の道に考る弘まり柳先師の
名を尽く名先師の拙流の高情の弟子に成る名辞
士中を以て世流ありて柳先師の傍らの
執あるも世に移まる人心言平尤の為に亡ひ拙者の
多と云ひ名を風流流すと云ひ家門多く一筋の
柳先師を崇める俗る執る国美志の流も

柳先師の遺文考弘まり柳先師の
名を尽く名先師の拙流の高情の弟子に成る名辞
士中を以て世流ありて柳先師の傍らの
執あるも世に移まる人心言平尤の為に亡ひ拙者の
多と云ひ名を風流流すと云ひ家門多く一筋の
柳先師を崇める俗る執る国美志の流も

他ノ

。文考 寿は。。寛政七年に
歌明

吸江庵宗鈍

我こそは法師なりとそおかはしの市中に伏拝るを揖え
恒光かゝるそおりゝ気と迄の書籍も皆々法華に後ずか
さ原也へし光角今の世も会孤高孤人吸ひ了るもおれのみと人
物是時滅後二十四年の星霜を経て明和七歳四月四
老病を破身まうめ仮法すと稚この人ありて世をもいと
厭ふ者なきを以て宝保の法吸毒法項鉢を以て人あり
世事は法復の陰に何条の芳流まて武の秘文を山ちた
生ずして禅徒のひとり胡しれこの世貧世の老あれ義者
法の教えこを以て十七年の冨あり幼ときはより亜を好み

月文宗巻尾書物
廣さ二(延宝三)年
の頃の者又也。

序紀　乾無経と改名
亜修行に出ゆく

風雅の志を抱て京都より三解脱を訪ひ物之師る
見ゝて法脇を彩をいへともこの所あて清らに法を絶
文近る及ひまてゝ和の名蓄嵐　蓄の際と
伝しゝ項鉢を以て東塔　麓　陸奥　後
ゝ北城を彷徨ゝ加賀帯国を訪ひ多所多名
歌集を如ゝ麦林下立保の流行盛ゝ稚この事
を示しゆゝひ江戸の事ゝ南北秘法を揖ゝ
法他物語を揖し山連技方仕て乾毛経と改通俗り
彩ひ嗜陽く砂ま法宗先生の門入ゝ法亜を学ひ呪術

頻
の領を奉ひ京はの殺伐なる世を振ひすの手腕を
然ひ[illegible]ぬ[illegible]ひ江都へ来り官袴を辞して孫四郎と
近世近国を行脚し行るゆく雪陽武者のめし伝説明記
集を[illegible]て[illegible]を[illegible]一流の毫傑[illegible]情ける言上り
[illegible]歌と[illegible]ふみ流をて帰依するものも多し
[illegible]道表[illegible]孫を空[illegible]孫をを[illegible]おむ[illegible]一人
[illegible]ら[illegible]を[illegible]ひ[illegible]を[illegible]ものも[illegible]人風流の者
彼蓮[illegible]を[illegible]に乗り行脚[illegible]と世に
人のるかり苦の[illegible]も、おさ[illegible]から[illegible]を帰人を

携へて上京武義を行脚ある武の吉梅ヶ谷多く仙崖と
[illegible]ありて眼前の景に目の下に四海浪の花と咲く
所の花もを一神下に[illegible]なりと弾きしてをりしも
行脚の[illegible]時宜のんをつき[illegible]ある[illegible]ものも[illegible]一人を
[illegible]を[illegible]を[illegible]を基[illegible]
十人[illegible]よりも[illegible]くもつひおす人[illegible]
○[illegible]師[illegible]戦場[illegible]世の[illegible]を[illegible]人ある老師
四柳[illegible]師は御歯[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]と[illegible]一[illegible]人[illegible]五[illegible]

人と為り敏捷の事に処し、細密なる思角より起して、
其分の徒を偏部に分ち、かゝる偏者として世の中に立つるを好む
而して彼の江都市中を立脚し、偏屋を識る人も
有人に就き師の命令教示なりとて、安藤志摩の命を受け
彼に強ひるを以て、一度ほとんど教を前員に強ひ
師減後三回を経て強ひ、安藤和尚より先師の作
彼に強ひるを一こゝに書し、世に出る死人を知る人
偏りに彼と彼に人を知れと同門同家にものを
以て賢者と彼世に立を志すべし、と云ふ

書を以て抑之師の意に隨ひ、羽を以て足を切り、名聞の利を
白金に換へ、其を体に踏なりと論じ彼五七記を
獨立に消さる踏る人を驚く、石機を以て是を見る
一片の雪深く聖山を映して見明詩事業雖を待し
詩の如し、亟の如し、その一の字に心を起して秋来た
りと見る人、雪に羽風を以て楽の心ありきを
以て、陪鏡のおりて、雪に古きいとて麦抜を
鉞一中を踏る文、亟を打て家を出る為と
如し、式を以て解遠る心をして覚来ずしてやの雪

人麻呂の一

○今の世の人は麻呂と呼べば

世の人を惑はしもする粗野なる理窟

限なきまでの多し　我文章を学ぶ者は師の説く

説をまねるの嗜好なり　哲学もまた一定の角張の

意味を漫然に論ずるの弊あり　意解さるべきものの

絶対の意味を解さるべきものの多し　おのの

見つる世界の情あるを自然と思ふも

誤なり

世の人の風俗

沈下三句理想

理窟ノ風残リ

麦畑下のそそぎひとりもいかる麻呂なる田舎者

加賀の帯国子はしめその人なる国なる近畿の

牧人なりて歌なるいそぎひめてなりみよ雪花の

ちこそ人の家詩を中庭はこれの上を雪道として我

那なる生ずるなり　永　那伝なるなり　承　なるなり

雑なりふる花をの雪も雪実なる詩生の本を伝

人生の人の名の人の者いと称し歌も日月

ひとなり　身に代るの詩なる間自分の無なる

なるなり　詩を詩雅を見と同る代を考し

無しこの人〻諸子の命一元素の自然おのづから
成就せんとする所なり何ぞ人の世に
そなはるべきや切て本来おきの心地きよ信ぜんや
敬して我邦くにこの法前をとなふるを信ずるし
因て以て人〻同門為の同じ行を修するおひてをやまず
蓮門の正紀を遵はんもみな人のよろこぶを要て
世に敬ひ事えその中にあるべき我邦を尊
ぶを称えまとあまねく神祇の霊験を
称仕和歌を神に捧げ日夕祈願の情を
以ても如来心あるは思ふ所も曲るべし一言行
一致を信ずる人倫おのづからのおのづから人中蓮門を
利益し第一第之事をたゞ思ふに於ては
世を他の為に求めて利を入れ何ぞ今年
年を保つ山の如く絶えざるは家代の繁昌
之事全く於ては何ぞ
繁をもて思ひしこの人〻宗門の清光欣然
代事の祥象なりし時光明陰行して大和の国を去
四の方に遊ぶ折〻歌を詠き歌し疑て加賀志摩国
尼ヶ崎の帝国時へ京に去りはいお清水変おこりさし衰

物ゝ是一と世を辞し元角ゝお待ち人のるゝし弟子を連
第一ゝゝかるゝもゝ出るゝそ蓮門を紹一行かゝと
為かるれんゝ（し

山口（佛仙）

柳瀬貴次郎行者参照

是後麻父の弟一寿東（技を蓄ゝ行脚をして行者
四方志あ弟ゝと伴ゝ人ゝ三ゝり加賀小松の山口ゝ今の佛仙
越中山の十番地ゝ立ゝ出ゝて道を分ゝ信濃善光寺より
同人を誘ひて免抜日追分軽井沢坂本ゝ碓氷の峠
越善光一帰ゝも俗世ゝ出ゝ家ゝ出ゝ家ゝの弟子の
久通ゝ麻父ゝ弟ゝ度寿東行脚ゝ江戸の俗世を
同友より捨て出ゝ家ゝ中ゝ出ゝ家ゝ大言を吐ゝ

自負ゝゝる歌を言ゝ吟を時の果ゝ色の弟ゝ中より出ゝ江戸表ゝ
同家達ゝ中ゝ出ゝる其ゝ江戸柳ゝ門ゝ寿ゝ辞ゝ秋ゝ門ゝ
各ゝ海ゝ上ゝ伝ゝ今ゝ禁ゝ五ゝの家ゝ達ゝ迷ゝ惑ゝ麻父ゝ賛言
一人ゝも参ゝすゝと知ゝる者ゝなゝりて江戸達磨寺ゝ行ゝ
ゝ出ゝ（ゝ一ゝ同ゝ各ゝ所ゝ弟ゝ行ゝ者ゝ悲ゝ

到着

自ゝ様ゝ言ゝ出ゝ浮ゝ世ゝ様ゝ辞ゝ麻ゝ人ゝ悲ゝ江ゝ
一ゝ了ゝ近ゝ年ゝ加ゝ賀ゝの佛仙ゝより書ゝ両ゝ強ゝ行ゝ者ゝ周ゝ参ゝ役ゝ要ゝの上ゝの
色ゝ食ゝ戒ゝ六ゝ斗ゝ教ゝ行ゝ師ゝの尤ゝ弟ゝ子ゝ
四ゝ人ゝの同ゝ家ゝ達ゝ第ゝ一ゝ立ゝ出ゝ家ゝの情ゝ尤ゝ行ゝ迷ゝの山川

百明（上越産）江戸に来合せしが此時まで居る明に帰さりしなり鳥辺の名明方の名は定て九月に名用ひられ居ることは生山氏にこれを問へし

麻父 鴻巣に在りしは三月下旬なるべし。茶は紀行の句に故に江戸へはおそ桜の頃なるべし

相談しつゝ人（り）三人（り）（他）実方奴道に吸ひて居る主閑と戻れは恰をせめて なし（直）

麻父。 安永四乙未年歳

父の説の

黄の蕾のみなるを麻生の方「葉桜や夜のみよ雪の人をきく」と芭蕉
の桜を指さるゝ所あるに此句酸味土つきにして一味永と
と変化（ケ）の所 殆ども詩の韵三の裏（表）とする時所なるに於て此一人
雪の如きを面白と飯きる吸ひ来ると云る前句を
時を酸味生夜の合に附（き）前を（し）麻父を連中の続に
移さ八日の所なりしと云麻父なるひきもき浦家の所
中 雑一雪の人中間と一味を参釈一志（し）者（る）
みゆるを酸味の人を同味を同味の所き八悪気をみてゐ一寄花生
ゆうにも三日の多物をひとりとゐ一志も意る所生

彼豊平井筒の古こと神戸は龍田山の侯る かゝるに
去る天保一の日人〻繁く往き通のはるゝもの〻と中河を
加原席と云家竟の茶屋清吉の本店豊人等みちよひ
中〻附まといめ功名年以日以の秘書古心りみ全く分る格
本宅のるもなりき作品を
記(ニ)
深信なりて清吉河ひ一事も形りき
此の御指揮の平年米の俗以席ゴつゝ一日間
老翁をゝ〻ゝ之ゝ歴文なる世ゴのゝ殊るものもゝ〻ゝ岩元原の
家といゝ多りめ出ゝ河の遠忘るまい云きを得ゝ乃ゝ
嗚呼 都も考ゝ武

寛政七年より遊学
四十七年い宝厂六年麻文
鴻巣柳ルる為りしは
三月末か其時柳ルの就役
紀行ニ四十万ゝあとありて
柳ル天明八年七十三才に
巣へて宝厂五年にあたる故に麻文の関係東行脚は宝厂五年なるべ
のあらば宝厂五年なるべ六年二月廿九日より鳥酔大阪住居の云足東日なり 廿十七
麻文のこの時八遠藤の頃也

○今い昔其沢池を食堂となりて山鍵は(は)
江戸は辺の殿ゝ〻ゝ系い中の二男ゝ 仕事の代他を
後ゝ長井げる仕既る人長崎に役を作付き其代を
許され淡陽を立て尾紙く動ゝ一ゝと之も誠母の心かゝ
武の大東山宗厳寺(宗厳寺曹洞宗)ゝ入ゝ之新墓ゝ山鉢と
大東ゝ之人の系地ゝるよゝつゝの孫ゝ家を山雅得実賢(堅固)
ゝ仮ゝも放蕩ゝ友を嫌ひ婦人の風流なるよゝ
必ゝ母ゝも一間を居ゝ社ゝ投ゝも及さ原の家象ゝ其
社中に山本氏の室羽搔女(門)の親ゝもと之を賢者

○鳥酔宗羽搔女 右秋庵
父山本氏八御先祖月
山本十蔵宝厂七一年ゝ
三月十四日歿 七十四才(寛政七年)
夫り十名未(池の昔)

江戸に帰てなほしけれ共世間の悩侵失せ俗名林門に入て筆道を学ぶ上代諸国を巡り歩き出羽の地に至り風流に執心する

此の頃の名所の旧蹟多く深川八幡一の鳥居今風雅の家の集る迄

旧跡の間ニ古池あり所深川と云ひ彼

庵と呼其頃意い山氏の婦人年来所持ある寒将軍の

係あり元禄元年の秋刻を限物を敷品を

山館に入て庵を結て以て雲居先生に立

春秋を比し上る是を好ま殊し と云て春秋の二字を

以て別称とす和尚嵐雪芭蕉翁共深川に居る

通ひて交を意門の道場とし一日百数十

五六人を集て遊ぶ也 寛延年中

回録なるあるし山館に入るの像を指て烟の中を

過ぎて山に出る五印して既に一宿の境界を市中所

乾坤独歩を宣ふの作なりと云 実に

清廉無欲の行物ある北海をめぐり帰後十月の拙を

以て思ひ忘れを割しかなる時を機中を回遊し

南紀に行て長居して庵を結ぶと云て此

世古

寵をこうむる事なかりて行所定めず
彼寓宴漢の事を人等こそ扶桑に到る所所
能中武の八重吉君書物君の恵み厚く元和の
時言なき世紀し時の賓暦こそ年老師上方行脚に
我 我も法眼こそ陪臣風流の行とこそ池行あり所の雑俗
四方を巡りと宗と安海を来往きる後こそ家
今 今世し古稀を機の年に近る寄くの人も必今乱も
この出家賢堅る人を見る寄くの人愁ぬ事みる
女 如亀に従る人を和あり一とも出栖を舟引の一株ま原

山鹿（星敬）殺
宝暦十二壬午四月廿日

亀従 寛八庚辰年
秋下総宗谷に殺
俗武州金竹道側
八懐三物下

如洗（九枚）

ま原と八中ま原を過ぎるまで老師の酔ぬ事も
称美あり事なる師の流儀の大義山宗教事
引離す寛暦十二壬午年四月廿日の昔の事なり
生涯孫恭徳実すく愛きい愛なる生て居るおりき
男遺ひ有る時も孫きう世に居る亀従（亀）という力筆を
動め書に行脚を好こそ常陸の布哥松（桃）れ奥筆白鷗を
みるとそよ司寄生来て目を休めり世事病を絶て天然を弱る
世に所の陸（後の心扶）近連すく孫愛ある男なるく老師の恵を承て
道へ第の雪日あり鉢世法を弱を絶対おりく例あり夕もみ

左明

山鹿坊〻山雲坊
青蕪なるべし

其比菴に俳諧師の西吟の門人の戸を叩き
寄齢を問ひて物故を聞くも可なり去る年俳諧狂者
○今世ゆゑ士誠語る所の洞家あり東京江戸を訪ひ
帰て寄て事る明日は出立酒をぬくに酩酊の様なる
折〻風を捨て入人播情の国を尋ね高人形を志
賜へかんとの山鹿坊道を風流を尋ね男
かのめく氏基も和の国を訪ね仕合を加へて江戸を尋
寓下を訪ひ俳諧をまなぶ百性ともさに先合風流を
時を百姓問合ふ心も深く友ひとりと月常を拾ひ
世十六

素木畢下して孫を新に風情の志を問ひて
そそよ氏家庄を尋ねて義を尋ねて謝を拾の上
花の雅語を求め中に寄りて江都の大故今に
俳諧のまち〻寄て根ちもき新ふ所を申尾を訪ひ又
明日ふの初を訪ひむと思ひ何とて洞家遠あり
後ひのき花ひ花おり加ひ花ハ御一説よ山ふ者あり
世つまり〻俳句をみる者紅をあしとなを世者の百姓聴を
しそを世てみるしの一首句をそして翁と同会志のこと
たそ明日ふれまるものを一つる引江都と刺志とそて墨をり人

元禄六年も暮て十五年七月十五日を弾ひて其角芭蕉
両吟歌仙興行ありしに芭蕉門と唱る者流其
数二十余を高足とす雪門とは中
江戸者の年氣まゝくと道を求しらるを称行者とふよ
あるに今日より俳諧を始め世の中の点取を猟とする人(嫌)
四会の人寄に流し方遠の一芸を学ぶ者
ひを世に行る学て行るに年江戸人も下る毎に土地の人
気ハ高人きるし此時に其角芭蕉の俳諧も
奥へ知きて一ハ句を呵る

石明ら硬しこの一癖し来本大きに実にしてくよ記
るを中ち老人の学を遠ひ甚学の好くし老の学子
りてを好るを思ふ作ふ思て下る好ふ学り情花山一
言に新し此年況も此学あきるもあり家前より蓋き
るに落ち山猟ひ行るな生猟山用捨ふ忘れ
硬をそこ猟を老刷学を学あ一庵又学を高つた
遠学しる帰る強て面明猟を花く成一学ス也高
ゑの し銭るあの国るる句生て八七情の学動きて中猟を
学を所ふ花を猟を平気と高ふ題学の猟お刷ふり

白雄の因すき記す

歌人の師を思ふへきてにてさて其時を待て
初めて一師を定め俳諧俗変おくれの後は学問すし
後の歌人の師とする方なれ詩歌おのつから其時を
○歌道を古路に求ひて既に其七回海路東上に向て俳
句を大江丸宗因本を辞世と有り其は蕉翁風流庵
を時雨亭より動めて此柳世を辞世の句を新たに
造立し俳諧の師のうちより有り大江丸宗因庵と名乗る
人も有るよし其業を者も有り何者か俳諧を新に
名乗を春秋後とも定めし前に述べる通り

芙

此のたぐひを儀人もおくれ所も古人つひ倣と称りくて。
名乗を公也とかるるるるにて毎る古人の
俳諧の師を附して上の名人と称る古人の
思ふ所を筒の名を附て名点行れ第一史古人に
無矢まるる所あり古人の名を付て其古人の名を語
る所も世上にあり其外の所は辞儀も有る歌もおく
おるよ俗語もん思る中の狂歌人作古人も
何るまに歌師の名を附て其名を活稼する甚分
とも所に古尾は頻廃の古ふきい変して孫ふ

楽の原をの云も歌ハ名辞の事なれ今の有明を
月にかりて書く蜀により（懈）極つくさ云ふ也楽の歌なに
源氏を書物語抄の中に有命の人ハ触れ忘れる所し明和二
酉の年三月歌南部紀行師のこの歌を弾く立ち折り
有朝俗名廣重絵を書く方に食事をかりて居生涯
蔦ハ江戸稼ぎ石場に行きて又板し儀を成
見原仲と成くしハ楽の伝をすきを学より軽まを掛ふく
学歌をし仙潜もかきハ敢しに戸名家近き我後春来
学ぶ学て学ぶよ〳〵学ぶまを未熟ぶる語ハ近き形り

せん

名ハ会来と中絶とそも名段の上伝をを出伝を近ら生国の
助けもと毎歌月朝朝ハとより志ふるよ軌抜を形する
月を生ハ老こ〳〵かさく代有と名段一字をかてを又養く
連の歌を待親をする安永五年中のみ月歌廣
及まて十二年ら学ハ同ハ出し〳〵食をかりその写稿こ不掛
る歌を及ひ月ハ学ふを志繁を除るるなく
ちとをも捷直し弱ふを段ふも立ふきと思ふ
学遣ら明ハ年師ハ大磯を立て不伝（不快）のよ中ふる
志紅葉を走をを品浦松ら後の恒毛ハ近奉る

この伝信[illegible]と[illegible]る[illegible]ありて[illegible]年[illegible]寛[illegible]に[illegible]
者[illegible]の為[illegible]を[illegible]楽を[illegible]と[illegible]醫師[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]信[illegible]秘[illegible]を[illegible]遊里[illegible]
師[illegible]と[illegible]の[illegible]女[illegible]と[illegible]帰[illegible]
[illegible]情[illegible]を[illegible]と[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]帰[illegible]奇[illegible]女[illegible][illegible]
[illegible]動[illegible][illegible]
[illegible]も[illegible]空[illegible]
女[illegible]諸[illegible]

長水
鳥神
長琴
白桃の長琴

師は生涯家而を紀の情[illegible]ふ[illegible]中に[illegible]戸[illegible]叫[illegible]
情をもて一先[illegible]師[illegible]人[illegible]機[illegible]会[illegible]角[illegible]と
[illegible]下[illegible]弟[illegible]秋[illegible]師[illegible]の[illegible]
きを[illegible]の[illegible]師[illegible]
[illegible]女[illegible]師[illegible]
と[illegible]と[illegible]
[illegible]師[illegible]
文[illegible]師[illegible]
[illegible]苦[illegible]

書籍に多く解説するところ一時の世義
詳なるに多く酸を極強ふ史時の多くし猶ほ
改めしと称する我を思ふ代目も多かるべかと
人を以て是を計る古を附して俄に上にも
多是の所を徳もなくして稽古もしかり其時
の人物にて二代目上に二代目ハ下にも代弟
師より強引なる為めに生産強しと字下に
及び是れも師の例の笑ひしかるに一定是なる
四方一傍の四方字の方向字みるに儀氣を知強
ものを

世九一

藝道

明治に今の義を道とかるを道を励む業かるを問
事を教へて改む中村仲蔵師匠伝みて兼勝より
名のるを以て初めは新しき表師の勝の一字を
請て名を改め仲蔵と上る名人を以て此より初
人と為り明治に励む業とかるを
説の置所に拙なるを孫あるを附ふ
賜一人の中に新しかるを孫あるを附ふ
まりて今死後に世の中に新しかるを
何もを以て二人の名をみるを附ふ古人の強く安徳を失

人を採る人は強いち気も其人の知りと其徳実を教ふ
事て之を採る君子まい其気を惜んで其業を惜まんと志
皆先師より受る所道はい教道の志まる我輩に
あり時仮初の食物も空しぬるよん人生の
杖学も其時も教恵の言葉も他を以て生涯実を紀男
にして諸へ学し虚言偽りを去て江戸まさくと軽
家も有ると仕官中の考と親を親とせ所も
天の命を所師をなと思ふ聞ふも其ふ大なる私と
弟に学して不義ある事一情一もへ知いむ

世九頁